

全世代リレーミーティングの開催

- 第1回 9月2日 **伊勢湾から世代も超えて流域を繋ぎながら**
魚と子どものネットワーク代表 新玉拓也氏
地域の未来・志援センター 事務局長 三ツ松由有子氏
- 第2回 10月21日 **ボランティア学生団体とのつながりから考える**
国際ボランティア学生協会IVUSA 学生リーダー 出水 響氏
同 事務局 箭野純貴氏
- 第3回 11月6日 **大学生の環境アクションを活かす&活かされる**
信州こどもエコレンジャー MAGES 代表 眞嶋美波氏 他
岡谷市市民環境部環境課 小口智徳氏

○学生や現役世代らが水辺環境保全活動に関わる入口(きっかけ)が違う3つの事例
を題材に、活動上の課題や継続・発展に向けた工夫などについて共有

第11回川ごみサミットでは

(これまでの川ごみサミットでは、川ごみ問題に取り組む活動現場を共有しつつ、行政側を含めた回収処理・発生抑制対策の取組や促進に関わるテーマで意見交換)

今回は、
学生や現役世代らが水辺環境保全活動に関わる入口(きっかけ)が違う**3つの事例**を踏まえて、

- それぞれの事例における課題や活動の継続・発展に向けた工夫などを共有
- 長い活動経験から得られた知恵？と若い世代なりの多様な手法？の融合
- 「流域総合水管理」「R7環境白書」～国内のあらゆる主体の参画と連携の促進
「第6次環境基本計画」～持続可能な地域づくりのためには、住民、民間団体、事業者、行政等による対話を通じた協働取組が重要

という観点から、どのような主体的な動きや連携の工夫(制度・財政的支援、バックアップ)があるのか、求められているのか、個別テーマに分けながら意見交換をしたいと考えています。

第1回 伊勢湾から世代も超えて流域を繋ぎながら

魚と子どものネットワーク代表 新玉拓也氏

地域の未来・志援センター 事務局長 三ツ松由有子氏

【鼎談・意見交換から】

○違ったスタンスの三世代であっても、相互理解が進めば望ましい連携が可能

連携した活動回数を重ねていくことで、相互理解は進む

○世代をつなぐには、「若者をお客様扱いせず、役割を負ってもらう」視点が大切

○いろいろな立場、意見を持つ人、世代が異なる人たちが集まって、課題の現場体験を共有することに意義がある

○学生にとって所属意識を持てること、企画・運営に携わり「自分ごと化」できること、は活動の継続につながる

○上記のような交流・連携は一朝一夕では生まれない。意図的かつ継続的に「場」をつくるための人手と費用が必要

○「何のための連携か」を共有する／流域の視座、流域連携がなぜ、大事なのか

○「場づくり」「連携」「共有」のコーディネーター、ファシリテーター＝中間支援的機能

各世代の役割分担の現在



	○80代 亀山の自然環境を 愛する会	○60代 水辺づくりの会 鈴鹿川のうお座	○30・40代 魚と子どもの ネットワーク	○10・20代以下 魚と子ども Kidsクラブ
Keywords	地域密着 学校との連携 平日OK ・活動できるメンバー の減少	行政のつながり 地域のつながり マスコミ対応 ・自身の健康問題 ・親の介護	自由な発想 行動力 研究機関との連携 ・仕事に家族に活動に 時間がなさすぎる。	未就学児から 小・中・高校生 もっと自由な発想 保護者の協力 ・部活や習い事し だいの活動参加
主な役割	地域の状況把握 学校の授業対応 準備や会議	行政との調整 地域との調整 マスコミへ発信	今までにない取組み イベントの企画・広報 研究の知見を反映	経験を積んで、 下級生に教えたい イベントで生き物 解説をする 企画会議に出席

⇒ 多世代が協力し合うことで、世代特有の課題を補いあう！

第2回 ボランティア学生団体とのつながりから考える

国際ボランティア学生協会IVUSA 学生リーダー 出水 響氏
同 事務局 箭野純貴氏

【鼎談・意見交換から】

- 「研修→実践(現地活動)→振り返り→研修」のサイクルで個々のレベルアップと組織の底上げを図っている
- 活動は2~3ヶ月前から参加学生が自ら準備し成立させる。
- 毎年学生が入れ替わる。卒業学生が日本各地に散らばり、社会問題への意識を持って地域のリーダーやプレイヤーとして成長していく姿が見られる
- 一つの活動を成立させるために必要なプロセスを学べる。全国に仲間ができ、現地の人々や場所を好きになれることが大きな魅力
- 学生では経験が薄いため、そこを事務局がサポートしてもらえる。人命に関わることなどは経験値が必要
- 「目的が何か、目的を達成するためには何をし、どういう人材や何が必要なのか」を学生という立場で突き詰めて考えることが根幹

国際協力



災害救援



地域活性化



環境保護



子どもの
教育支援



第3回 大学生の環境アクションを活かす&活かされる

信州こどもエコレンジャー MAGES 代表 眞嶋美波氏 他
岡谷市市民環境部環境課 小口智徳氏

【鼎談・意見交換から】

- 伊勢湾答志島で1泊2日の海洋ごみ調査を実施。活動の狙いは、世代・地域を超えた協働を学ぶこと、上流域に暮らす者の責任を考えること
- 若い世代を「お客さん」ではなく「対等な仲間」として活動に参画してもらうことが重要
- 持続的な活動のためには後輩への引き継ぎが重要な課題となっている。活動のやりがいは、現場での体験を通じて新たな学びが得られることにある。
- OBがネットワークの橋渡し役となることで、在学生への引き継ぎを円滑化し、継続性を確保している(IVUSA)
- 行政の人的資源が限られる中、「つなぐ」役割を担う中間支援組織の存在は大きい
- 若者を活動に参入させるには、ある程度の役割を与えることが有効
- 一人では無理、「みんなで頑張る、みんなで広げる、みんなでつながる」ことが重要
- いい川・いい川づくりワークショップは、多世代が出会い共有理解できる大切な場

行政単体での活動はあまり当てにできない
環境団体などとの連携を促さないと舞台はつukれない
だが、これができれば効果は大きい

もともと数年で移動してしまうお役所は継続性に問題がある。さらに、一昔前と違い、今のお役所はそこそこブラックな状態。予算が確保できないことより深刻なのは人員と人材が確保できないこと。専門家がいらないのはもちろんのこと、未来への投資である環境学習などに積極的に係われる人員を割くだけの余力がない。

しかし、今回の事例が示すように、

事務手続きや各方面への折衝が得意な【行政】

専門的な知識や経験、フィールドを有する【環境団体など】

体力と柔軟な発想があふれる【学生】

が上手く連携できれば、かなりの効果を生み出すことができる。

あくまでも一つの事例から導き出した考え方であり、3者の思いが合致しなければできないことだが、この状況を作り出すことも一つの考え方といえるのではないだろうか。